

ドクターの
肖像
#314



お お ほ り ま こ と
大堀 理

医療法人社団 實理会 東京国際大堀病院 理事長・院長

して膀胱と尿道をつないだ。

「Da Vinciと共に行う手術は、常に安心感があります」

その患者は術後の尿失禁もなく、排尿障害も改善された。退院に際して大堀氏が患者に術後の経過と予後について説明していた時だ。話を聞く患者の目から涙がこぼれ落ちた。患者は一言絞りだした。

「Thank you……」

がんへの不安、異国の地で手術を受ける心細さが消えて喜びが溢れたのだ。感極まった2人は無言で堅い握手を交わした。2年後、母国へ戻った患者よりメールが届き、元気でいることに大堀氏は安堵した。

大堀氏は東京医科大学泌尿器科教授・ロボット手術センター長として、日本のロボット手術の普及や術者育成に取り組んだ。2019年に東京国際大堀病院を34床で開設し、以来1300例を手がけてきた。今その舞台をワールドクラスに進化させる構想を抱いている。

「100床のロボット手術センターを創ります」

厳しい医療経済環境の中で、大規模な手術センターの狙いは何か。何がその決断を後押ししたのか。彼はこう答える。「私が私らしく使命を全うしていくための装置、といったところかな」

深みのある答えの真意を探りながら、大堀氏の半生を見ていこう。

周回遅れの医学部合格 23歳で岩手医科大学へ

「5歳まで東京で過ごした後、岩手に引っ越しました」

生まれは東京都渋谷区本町。東京慈恵会医科大学泌尿器科の勤務医であった父の大堀勉氏が、1961年に母校の岩手医科大学泌尿器科学講座の准教授に就任したことを機に転居した。医局運営で忙しい父とは会話も少なく、大堀少年は中学時代からバスケットボールに打ち込んだ。

「担任から『お前は受からない』と言われてきましたが……」

それでも、進学校である岩手県立盛岡第一高等学校に合格。ところが1年生の数学はゼロ点。常に成績は学年350人中300番台。当時颯爽と文壇に登場した作家・五木寛之の作品に憧れ、作家の母校である早稲田大学文学部を目指した。だが、現実は甘くない。2浪の末に早稲田大学社会科学部に入學したが、達成感よりも満たされないう思いのほうが強かった。

「何か違うな……」

体育のみ出席して後は麻雀ざんまいのある日、高校の先輩と食事をした。岩手医科大学に進んで医師になった先輩は言った。

「医者はいいぞ、お前も医者になれ」

頬をたたかれた思いがした。先輩か

らするとバスケット仲間の勧誘にすぎ

なかつたが、大堀青年は心が晴れた気分、早速早稲田大学に退学届を出した。だが文系の身には医学部合格は高い壁だ。再び2浪して1979年、都内の私立大学と岩手医科大学に合格を果たす。

「母は大喜びしてくれました」

高校卒業以来5年に及ぶ回りの道を成果を喜び、大正生まれの父は難しい表情で何も語らなかつた。だが人づてに喜んでいた、と聞かされた。

何しろ父は忙しかつた。泌尿器科教授職を務めつつ、盛岡市月が丘に透析病院を設立していた。大学に設立資金がなかつたため、個人で投資家を募つての開院だつた。投資家と内科医、父の3人の思いを込めて名付けられた三愛病院は143床で、当時最先端だつた血液透析で慢性腎臓病患者を救つていた。

アートからサイエンスへ 日本と米国の世界観の転換

「回りを道をした分、他の医学生より視野は広くなりましたね」

相手の婚期も考えて在学中に結婚し、生活費を稼ぐアルバイトもこなした。卒業後の進路は、複数の外科系分野を天秤にかけた末、泌尿器科を選択。相談した父から助言をもらった。

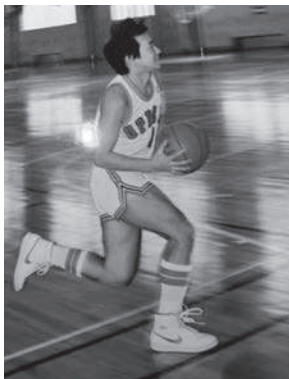
「研究に進むなら慈恵、臨床を目指す

写真で見ると

軌跡

Doctor's HISTORY

Makoto Ohori



岩手医科大学バスケットボール部時代



盛岡第一高等学校バスケットボール部時代



なら北里だ」

北里大学を選んだのは臨床を好んだことと、泌尿器科教授の小柴健氏がかつて実家の「下宿人」であつたからだ。小柴氏は東京慈恵会医科大学を卒業後、ハワイ大学で研修医となり、カリフォルニア大学ロサンゼルス校(UC L A)でフェローを務めた異才である。帰国後は岩手医科大学の泌尿器科に入局した。大堀家に寄宿しながら、日本に前立腺肥大症手術を普及させ、岩手県で初の腎臓移植も手がけた。

大堀氏が1986年春に入局すると、診療最前線の洗礼を浴びた。

「異常な忙しさでした」

北里大学に着任後10日間、一度も帰宅できず、当直明けでも業務は終わら

なかつた。しかも指導を仰ごうとしても「背中を見て覚えろ」という文化が根深く、体系的な教育よりも現場での経験が重視される環境だつた。

「あの忙しさが自分の基礎になつていますが、それはアートとも言うべき世界でした」

なぜその治療をするのか言葉で教えてもらえず、ひたすら観察し、不明な部分は自ら学ぶ姿勢が求められた。しかも当時はまだ患者にがんの告知をしない時代である。

「瘢痕を切除しましょう」と説明して行う前立腺がん手術は、大出血が当たり前だつた。術後の患者の尿失禁に対応しながら、研修医の大堀氏は何度も感じていた。

「これはやつてはならない手術だな」

医師になつて4年目、アメリカ留学が決まつた。小柴氏のUC L Aフェロー時代の後輩が教授を務めるヒューストンのベイラー^{※1}医科大学である。同郷の頼川晋^{※1}氏の留学の後任として1990年に渡米。指導教授はPeter Scardino氏だつた。

「スカルディーノはみんなからミスター・スマイルと呼ばれていました」

いつも笑みを絶やさず、抜群に手術がうまく、教育にも情熱を注いでいた。毎週水曜日朝7時、泌尿器科だけでなく病理医、腫瘍内科医、放射線科医が集まる「Grand Rounds」と呼ばれる症例検

討会が開かれていた。そこでは数値が飛び交つていた。

「がんである確率は何%か、治療後の再発率は条件ごとに何%か。全てがサイエンスで語られる世界でした」

自分が経験してきた日本の医療とは、正反対の世界観があつた。大堀氏は衝撃を受けながら、いつかミスター・スマイルのような医師になろうと心に誓つた。そのためには越えるべき言語の壁があつた。

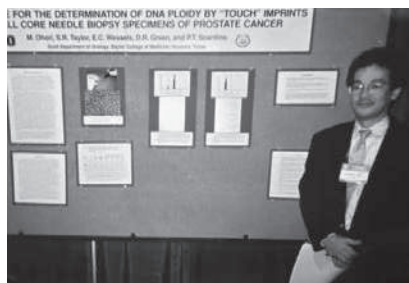
標本データを基に論文発表 アメリカンドリームを実感

大堀氏の日課は、外来での前立腺の超音波検査や生検である。通常でも1日に10〜15件をこなす忙しさで、前立腺がん検診の際には2日間で数百人の肛門に指を入れて行う前立腺触診で指関節を痛めた。英語では苦勞の連続だつた。「暗記したフレーズを、そのまま患者さんに告げていました」

検査助手が同席すれば助けってもらえるが、いない時は英語が拙い外国人医師を患者は疑いのまなざしで見たと。VA Hospital(退役軍人病院)から送られた患者を検査した日も検査助手は不在だつた。診断は明らかに前立腺がんだった。大堀氏が英語でがんの可能性を説明すると患者が問い返した。「私のがんだつて? 本当なのか?」



サンアントニオでのアメリカ泌尿器科学会総会にて。北里ファミリーと(1993年)



アメリカ泌尿器科学会(1992年)



スカルディーノ氏が来日。頼川晋氏と会食



どんな症状になるのか、どんな治療をするのか、いつ判断するのかと、患者は矢継ぎ早に質問してきた。大堀氏は精一杯答えた。拙い英語を一語も漏らさず聞こうとする患者を見ていて、気がかされた。

「私の英語ができない悩みなんて、生死がかかった患者さんの不安に比べるなんてちつぽけなのか」

それ以来、せき止められたものが一気に流れ出すように、拙い英語でも何とか口から出てくるようになった。

「加えて負けん気も出てきました」

1990年代初頭のアメリカでは、前立腺全摘標本の研究で名門大学がし

のぎを削っていた。PSAの普及とともに爆発的に増加した前立腺がんの病態の評価や治療方針の決定に明確なエビデンスが求められていたのだ。大堀氏は病理学教授のThomas Wheeler氏を訪れて頼み込んだ。

「ウィラー先生、500人分の標本データをまとめてほしいのです」

ウィラー氏は500という数字を聞いて驚いたが、最終的にはやろうじゃないか、と言った。研究課題は「PSAで発見された前立腺がんは、生活や命を脅かすがんなのか？」というものだった。

前立腺がん手術で摘出した306例の標本を直腸指診、超音波、PSAの各検査グループに分けて解析した。その結果、PSAで発見されたがんのほとんどが臨床上に重要であり、一方事故などによる死亡者からの剖検で偶然発見された前立腺がん90例の大半は臨床的意義が低いことが明らかとなった。スカルディーノ教授の自宅で、夜遅くまで何度も議論を重ね、ついにPSA検査の有効性を証明した。

「500人のデータを基に、名門大学に先んじて、量と質の両面で突出した成果を上げることができました」

大堀氏の論文は300回を超える引用数を集め、PSA検査普及の推進力となった。さらにスカルディーノ教授もこのデータを基に重要論文を発表。

2年間の留学を終え帰国準備に入っていた大堀氏に教授がこう言った。「インストラクターのポストを用意しよう」

一介の留学生だった大堀氏がオフィスを持つスタッフに登用され、翌年にはアシスタントプロフェッサー(講師)に昇任した。帰国は延期されることとなった。広大なテキサスサイズの部屋が与えられ、給料などの待遇も飛躍的に向上し、大堀氏はこれがアメリカンドリームであると実感した。この後の2年間でアメリカ人研修医を教える立場にまでなり、教える子には後にロボット手術のパイオニアとなるVipul Patel氏もいた。

**大きな海を知り
深い空を知る蛙になれ**

4年半に及んだ留学を終えて、大堀氏は北里大学に帰局、まもなく講師に昇進した。検査経験を積み、研究でも成果を上げたとはいえ、臨床・手術からは離れた。「目の前の患者さんに常に最適な判断が出せるのだろうか」と不安を感じていたが「これから日本一の講師になればよい」と考え直した。

その後、母校である岩手医科大学に戻ったが、アメリカ生活が長かったせいか新しい環境になかなかなじめず、満たされない思いを抱いていたある日、一通



スカルディーノ氏が推理小説家の妻・Judith Kalman氏と日本を訪問した時



シチリア島での学会、有名教授に囲まれて



メモリアル・スローン・ケタリングがんセンターにて

* The Pathological Features and Prognosis of Prostate Cancer Detectable With Current Diagnostic Tests : Makoto Ohori, Thomas M. Wheeler, J. Kay Dunn, Thomas A. Stamey, and Peter T. Scardino; Journal of Urology Nov 1994

の英文メールが届いた。スカルディーノ教授からだった。「また一緒に仕事をしないか？」

大堀氏は日本でのキャリアを振り切るように受諾した。ヒューストンへ飛ぶ直前、スカルディーノ氏の事情でニューヨークに赴任地が変わり、1999年にメモリアル・スローン・ケタリングがんセンター内の前立腺診断センター副所長というポストに就任した。

大堀氏の帰国後から再渡米までの4年間は、「模索の時代」であった。確たる軸をつかもうとしながら、つかみきれなかった。その思いは自らの座右の銘にもじみ出ている。

井の中の蛙 大海を知らず、されど空の深さを知る

研修医時代はただ忙しさに追われ自らの針路が見えず、アメリカという大海に身を置き、医療における科学的な正しさを感じた。一方で、地道な前立腺の超音波を長期間毎日継続したことで、井戸の中の蛙のように、一つのことを深く知ることが大切だと思えた。さらに世界で最も古いがん専門の歴史を持つメモリアル・スローン・ケタリングがんセンターは「深さを知る」専門家の集団で、何が正しい戦略なのかを世界に発信していた。どうすれば大きな海を知り、かつ深い空も知る蛙になれるのか？その問いかけが、アメリカ発の技術を日本に普及させる「軸のある転身」につながっていく。

「前立腺全摘手術はロボットで行うべきです」

大堀氏のスローン・ケタリング在籍時の成果の一つに「ノモグラム」の開発がある。ノモグラムは多くの因子から数学的な分析で正確な予測値を出して臨床の場で使うツールである。日米の多くの前立腺全摘術例を抽出して、PSA値、生検の結果、病期診断とがんの浸潤の関係を統計的に解析し、多くのノモグラムを作成した。この表を用いることで、個々の患者のがんの有無、浸潤、転移、再発リスクなどを数値化でき、患者・医師の治療方針を決める手助けとなった。ノモグラムの成果は、徐々に全米の医療機関で使われ始めた。

「数学ゼロ点だった私が、いつの間にか統計のプロになりました(笑)」

しかし数値はつかめても手術にはまだ課題があった。それも、大堀氏の滞米中に氷解する動きがあった。

「手術ロボット『da Vinci』の登場です」

従来の腹腔鏡手術領域が、ドミノ倒しのように次々とロボットに置き換わっていった。大堀氏自身は滞米中に体験できなかったが、2004年に帰国後、東京医科大学に移って秦野直教授と共に開腹手術をしていた。その翌年、ついにその機会が訪れた。

「東京医大に手術支援ロボットのda

Vinciが導入されました」

心臓血管外科の旗手の渡邊剛氏(現・ニューハート・ワタナベ国際病院長)が、同大の兼任教授着任時に導入された。大堀氏と東京医大の同僚はアメリカ・クリーブランドへda Vinciのライセンス取得に向かった。講師はPaoli氏であった。丁寧に教えてくれたのは、ベイラー医科大学での研修医時代に大堀氏がボスだったからだ。

「世界のPaoliに教えたことを私はすっかり忘れていましたけど(笑)」

2006年、満を持してロボット手術第一例を実施。

「これまで見えなかった術野が開けて、奥深くまで手が届きました」

出血もわずかで、術後尿失禁もほとんどなく、性能も温存できる。徐々に症例数を増やし、2010年には前立腺全摘手術の大半をロボット手術に移行した。全国を行脚した手術講演で大堀氏は高らかに宣言した。

「前立腺全摘手術はロボットで行うべきです」

快進撃の中で、肩書きも次々と塗り替えられた。2007年に教授に就任、翌年には前立腺センター長、さらに2014年にはロボット手術センター長に就任。診療科横断のロボット運用体制の確立、手術課題の抽出整理と手術の標準化に努めた。2012年に前立腺がんに対するロボット手術は多く



叔父の大堀英二氏88歳の誕生日
(92歳まで医師として活躍)



東京医科大学ロボット手術センター長時代



スカルディーノ夫妻、菊地栄次氏(現・聖マリアンナ医科大学教授)夫妻、黄英茂氏(現・横須賀市立総合医療センター部長)と(2002年)

日本の現場力は世界一です。

良い環境を作れば世界一になれる。

そこでオールジャパンの力を結集します。

のがんの中で初めて保険適用となり、
待望していた患者が全国から押し寄せ
た。日本のロボット手術の歴史におい
て全ての始まりとなった記念すべき年
となった。東京医大は前立腺がんロボッ
ト手術の日本トップに躍り出た。

「大海に出て、空の深さを知る蛙にな
れるかもしれない、と思えました」
サイエンス重視のアメリカと細やか
な手術を得意とする日本、大堀氏は日
米の卓越を統合するロボット手術の旗
手となった。

2019年ついに

東京国際大堀病院設立

2017年のある日、外来に来院医
師でもある担当患者から、「先生は定年
後どうするのですか?」と聞かれた。大
堀氏が、まだ迷っていると答えると、患
者はこう言った。

「先生、病院を作ればいいじゃないで
すか」

再び頬をピシヤリとたたかれた。転
身へのゴングがそのとき響いた。

早速知人の企業家に相談すると「ス
ポンサーを見つけないさい」と助言された。

そこで真っ先に連絡をしたのが、医療
機器メーカーのニプロ株式会社である。

「父が三愛病院で共に成長した会社で
した」

ニプロ社は三愛病院に透析用ダイア
ライザーを提供して業績を伸ばした。

当時の社長は初代佐野實氏で、その甥
の佐野嘉彦氏が社長に就いていた。ほ

ぼ初対面の相手にメールを送ると、す
ぐに返信があった。大堀氏は事業計画

書を持参して臨み、支援の約束を取り
付けた。閉院した三鷹市の産科病院を

改修し、2019年に東京国際大堀病
院を開設した。大堀氏がまず心を砕い

たのは、患者や患者予備軍とのコミュ
ニケーションであった。

「ホームページの制作に特に時間をか
けました」

トップには院長の無料ネット相談を

置いた。がんだけでなく、排尿の悩みや
尿路結石などの幅広い相談を受け付け

た。泌尿器の悩みは人に打ち明けにく
いが、院長自らが毎晩時間をかけて回

答を書いた。
「患者さんは不安ですから、手術のこ

とも予後の生活についても知りたい」
大堀氏の心の底には、留学時代に質

問攻めをされた退役軍人病院から来た
患者が今も棲んでいるようだ。サイト

に掲載している疾病情報や医師の実績、
詳細な症例数だけでなく、院内の廊下

にまで情報が掲示されている。
「UroNa(ウロナビ)の威力は大きいです」

ウロナビ(MRI超音波弾性融合画
像前立腺生検システム)は前立腺の超

音波画像をMRIで立体画像化する先
端的検査システムである。がんが疑わ

れる部位を正確に狙って生検の穿刺が

できるため、迅速な生検診断と高い精
度で、PSA検査の回数も減らすこと
ができる。この規模の病院には珍しく、
院内には病理検査室も設置している。

さらに婦人科ロボット手術の第一人
者であり東京医科大学の婦人科主任教
授であった井坂恵一氏を招き、子宮筋
腫や子宮頸がんなど婦人科手術も行え
るようにした。全国から患者が来院し
ている病院は順風満帆だが、大堀氏は
新たな挑戦を企てている。

私らしく使命を 全うする舞台

2025年秋、大堀氏は都内にある
大手商社の会議室にいた。面談相手は
その企業の会長である。持参した事業
計画書を基に、全国の医療機関が置か
れている厳しい経営環境、施設改修も
設備更新もできない窮状、後継者不足
や医師の偏在など課題を列挙した。
「これらの課題を解決するロボット手
術センターを作りたい」



100床規模のセンターには国産手術ロボットInoaviも導入し、泌尿器科に限らず多領域の患者を集め、執刀医の育成も行う。このセンターの土地建物を企業が所有し、医療機関は運営に専念する「所有と経営の分離モデル」とする。

「オールジャパンの力を結集します」

医療機関経営の救世主となる先駆け事業に投資をしてほしい、と頭を下げた。

会長は快諾した。なぜリスクを背負って大企業に挑むのか？何が大堀氏の背中を押すのか？

「A Iに聞くと『34床では経営困難です』と言われましたからね」

と笑ってとぼけるが、彼は「神の手」に導かれてきたのだ。医師になれと勧めた先輩、回り道の医学部合格を喜んで父母、臨床も教育もプロである恩師、不安に駆られた患者や術後に涙した患者、彼らこそ「見えざる神」なのである。彼らの思いや願いを使命として自分の中に注ぎ込み、手術支援ロボットを普及させ、多数の患者を支え、そして日本医療を救う事業モデルの創造という舞台に挑んでいる。

「自作自演の舞台のようなものですが、日本の現場力は世界一、そこに良い環境を作れば間違いなく世界一になれる」

日本発、世界一の舞台を創るまで、私らしさを全うする――。

■PROFILE_ おおほり まこと

- 1986年 岩手医科大学 卒業
北里大学病院 研修
- 1990年 米国ヒューストン市 ベイラー医科大学 留学
- 1992年 ベイラー医科大学泌尿器科 講師
- 1999年 米国メモリアル・スローン・ケタリングがんセンター
前立腺診断センター 副所長
- 2007年 東京医科大学 教授
- 2008年 東京医科大学 前立腺センター長
- 2014年 東京医科大学 ロボット手術センター長
- 2019年 東京国際大堀病院 開院

■学会・資格

日本泌尿器科学会、日本癌治療学会、日本癌学会、日本ロボット外科学会、日本泌尿器内視鏡・ロボティクス学会、日本性感染症学会、アメリカ小線源学会、ロボット外科学会、国際泌尿器科学会、アメリカ泌尿器科学会、欧州泌尿器科学会



東京国際大堀病院開院前内覧会。集合写真
(2019年)